[head](koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　　宰主　　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。  
  
陽貨第十七

１）陽貨欲見孔子孔子不見歸孔子豚孔子時其亡也而往拜之遇諸塗謂孔子曰來予與爾言曰懷其寶而迷其邦可謂仁乎曰不可好從事而亟失時可謂知乎曰不可日月逝矣歲不我與孔子曰諾吾將仕矣

yáng huò yù jiàn kǒng zǐ kǒng zǐ bú jiàn kuì kǒng zǐ tún kǒng zǐ shí qí wáng yě ér wǎng bài zhī yù zhū tú wèi kǒng zǐ yuē lái yǔ yǔ ěr yán yuē huái qí bǎo ér mí qí bāng kě wèi rén hū yuē bù kě hào cóng shì ér qì shī shí kě wèi zhì hū yuē bù kě rì yuè shì yǐ suì bù wǒ yǔ kǒng zǐ yuē nuò wú jiāng shì yǐ  
陽貨孔子を見と欲す。孔子見へず。孔子に豚を歸る。孔子其の亡きを時として、往きて之を拜す。諸塗に遇り。孔子に謂ひて曰く、來れ、予爾と言はん、曰く、其の寶を懷きて其の邦を迷はす、仁と謂ふ可しや。曰はく、不可。事に從ふことを好みて亟時を失ふ、知と謂ふ可しや。曰はく、不可。日月逝く、歲我と與とすることなし。孔子の曰はく、諾、吾將に仕へんとす。  
  
陽貨、孔子に会おうとするが、孔子会わず。陽貨、孔子に豚を歸（おく）る。孔子、陽貨の留守を時として行き答礼せむとす。途中で陽貨に遇（あ）ふ。孔子に謂（かた）りて、「來（きた）れ、予（よ）、爾（なんじ）と言はん。『其の寶（たから）を懷（いだ）きて其の邦を迷はすは、仁と謂うべきや。』」と曰ふ。「不可」と曰ふ。「好みて事に從はむとし、亟（しばしば）時を失はば、知と謂ふべきか」「不可」と曰ふ。「日月逝（ゆ）きて、歳（さい）、我と與（とも）にせず。」孔子、「諾（だく）吾將（まさ）に仕（つか）へむ」と曰ふ。  
■　左伝によれば、昭公25年（BC517）、孔子35歳の頃、季孫氏の季平子と郈（こう）氏の郈昭伯が闘鶏で争いを起こした。季平子は自分の鶏の羽根にからしを塗りつけながら、郈昭伯が自分の鶏の蹴爪に金具をかぶせたことに腹をたて、郈氏の邸の敷地を取り上げた。郈氏はこれを昭公に訴えた。三桓氏のなかで季孫氏の力が強く、三桓氏の足並みに乱れがあり、昭公は季孫氏を討伐し、これを捕らえることができた。郈氏は季平氏を殺すべしと進言したが、昭公はそうしなかった。叔孫氏は事態を静観していたのであるが、季孫氏が滅ぼされることは、ゆくゆく叔孫氏に及ぶと考え、季孫氏救出の兵を出すことになった。事態は一変し、昭公の軍は敗れる。郈氏を操っていたのであろうか、孟孫氏の孟懿子はこれを聞くと、郈昭伯を殺してしまった。かくて、三桓氏が魯の君主を追い出し、昭公は斉に亡命し、孔子も昭公の後を追って斉にゆく。斉は昭公を魯に戻そうとするが昭公の評判は芳しくなく、魯では民が季氏を支持するという事態となっていた。昭公27年（BC515）鄆（うん）に居た昭公を孟懿子と陽虎が攻めており、陽虎が季氏のなかで力を有していたことが確認できる。孔子もこの年に魯に帰国、昭公は帰国を果たせず、32年に亡くなり定公が即位、定公5年（BC505）陽虎が季桓子を監禁するという事件が起こる。定公6年に鄭に侵入し匡（きょ）を攻めたとき、これを指揮していたのが陽虎であり、後に孔子が匡で陽虎と間違われて難に会うことになる。この年陽虎は周社で定公と三桓と盟を交わし、国人とは亳（はく）社で盟を交わし、五父之衢で（反対者への）詛（のろ）いを行った。論語では[八佾21](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/hachiitsu.htm)）哀公が社を問うて宰我が「周人は栗を以てす。曰く、民をして戰栗せしむ。」とこのことに言及した。陽虎は孔子が三桓氏による政治をよしとしておらず、当時優秀な弟子を抱へており、ブレーンに引き込もうとした。史記に、孔子が幼少で母を葬った頃のこと、「孔子、絰（てつ：喪服を身につけるとき首と腰につける麻の帯）を要し（喪中に）、季氏、士を饗（饗食に招く）し、孔子、與（あづ）かりて往く。陽虎、（孔子を）絀（しりぞ）けて曰く、『季氏が士を饗すは、敢へて子（孔子）を饗するに非ず。』孔子、これに由りて退（しりぞ）く。」とあり、昔からいい印象が無かったのかもしれない。■　孟子、滕文公章句に、「陽貨、孔子を見んと欲して、礼無しとせらるるを悪(にく)む。大夫、士に賜うこと有るに、其の家に受くることを得ざれば、則ち往きて其の門に拝す。陽貨、孔子の亡きを窺い、孔子に蒸豚(じょうとん)を饋(おく)る。孔子も亦其の亡きを窺い、往きて之を拝せり。」としている。歸は饋kuì、禮物として食品を贈り物とすること。重臣からの贈与があれば、家にゆき謝意を表すのが禮。豚は一匹、あるいは一匹以上の子豚、成長した豚は豕、孟子は蒸豚としており、少なくとも一匹まる蒸の子豚といふ豪華なものであった。■　時其亡也の其亡とは陽貨の居ないこと、時とは機会、潮時のこと、陽貨の留守を狙って答礼に行く、孔子は、顔を合わすことを避けた。■　遇諸塗は遇之於途、偶然途中で陽貨に会う。孔子が留守中に来るだろうと読んで、途中で待ち伏せていたとする説もある。■　來予與爾言は師が弟子に言ふような口上。孔子が不惑とした40歳は昭公35年（BC512）陽貨が季桓子を監禁した頃は孔子47歳くらい、史記は、「季氏、亦、公室に僭し、陪臣、國政を執る。是れを以て、魯、大夫より以下、皆、僭し、正道に離る。故に、孔子仕へず。退きて詩書禮樂を修む。弟子彌（いよいよ）衆く、遠方より至り、業を受けざる莫からむ。」とする。陽貨は孔子より年長■　懷其寶、寶とは孔子の学才とその弟子、それを懐にしておりながら、迷其邦、その邦とは魯のこと、それを用ゐずして魯を迷はしている。それでは仁と謂ふべきか。つまり、季氏の専横と戦っている陽貨の招聘に応じないことを、それで仁と謂へるかとたたみかけた。■　不可は孔子の返答とされるが、孔子が応じず、陽貨が不可と言ふといふも味がある。■　好從事、仕事に就きたいと願ふも、亟は数（しばしば）失時、時期を失している、弟子に教育するだけが知と謂うか？ここぞといふ時に、政治的に活用されないでいて知と謂へようか。■　日月逝、日月は過ぎ行く、待ってくれない、歲不我與、歳は我を共にせず、待ってはくれないこと、今と言う機を失えば、もう、それまで、と孔子に決断を迫った。この舌鋒には孔子も抗えなかった。■　諾は唯よりぞんざいな言葉、吾將仕矣は上っ面だけ相手にあわせたとされるが如何に。優柔不断に付け込まれた形であり、孔子の痛いところを雄弁についている。陽貨はただものではなかった。このことが後の孔子に多大な影響を与えた。■　陽貨は、季桓子の弟、季寤（ご）、公鉏極（季氏の族員）公山不狃（弗擾：費の宰）、叔孫輒（ちょう）、叔仲志の五人、季孫氏、叔孫の不満分子と手を握り、叔孫武叔を叔孫輒に代え、季桓子を季寤に代え、己は孟懿子に代わろうとし、季桓子を捕らえるが、（孟孫氏の）成の宰、公斂処父の助言で守りを固めた孟懿子の館に逃げ込まれる。陽貨は定公と叔孫武叔を脅し孟懿子を攻めるが、成の公斂処父に攻められ、「盜竊寶玉･大弓（左伝、定公八年：BC502）」、盜とは陽貨、魯の宝玉、大弓を竊（ぬす）んで讙と陽関に入り、魯から離反する。翌年、宝玉、大弓を魯に返すが、魯軍に攻められ、斉に逃げ込む。斉の景公は魯を攻めるといふ陽貨に加担しようとするが、鮑文子に戒められ陽貨を拘留、陽貨は宋に脱走し、晋に逃れ、趙氏に仕官する。衛の霊公の後継に際して、陽貨は晋趙鞅とはかって、衛の太子蒯聵を衛に送り込もうとしており（哀公二年BC493）、孔子の反粒子のごとき行動を執っていた。この失敗に懲りて定公は孔子を採用し、夾谷での斉との交渉で陽貨が斉に持ち出した鄆・讙・亀陰を取り戻している（定公十年：BC502）。  
読書会：[2009年7月23日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年７月23日)

２）子曰性相近也習相遠也

zǐ yuē xìng xiāng jìn yě xí xiāng yuǎn yě  
子の曰はく、性相ひ近し。習らへば相ひ遠し。  
  
先生が申された。性はお互い近いものであるが、習うことによりお互い遠くなる。  
■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)に、「此の謂う所の性は、氣質を兼ねて言う者なり。氣質の性、固より美惡の同じからざる有り。然れども其の初を以て言えば、則ち皆甚だしくは相遠からず。但善を習えば則ち善、惡を習えば則ち惡。是に於て始めて相遠きのみ。○程子曰く、此れ氣質の性を言い、性の本を言うに非ざるなり。若し其の本を言わば、則ち性は卽ち是れ理、理は善ならざる無し。孟子の性善を言う、是れなり。何ぞ相近きことか之れ有らん、と。」ある。[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、性は生まれつきの稟、習は生まれて後の儀、稟には厚薄があるがそう差はない、習は善友と交われば善、悪友と交われば悪が身につき、洙泗之教（洙水と泗水の教：孔子の教）を習へば君子、申商之術を習へば小人となるといふ。■　性、中庸に、「天の命ずる之を性と謂ふ。」とある。つまり、人為でないものであるが、孔子は、人の性はお互い近いものと言ふのみである。相はお互い、誰でもであろうが、民はこの場合想定されず、政治に参加する士クラスまでであろう。老荘の徒は、先王の道を人為となし、無為自然を唱へた。徂徠によれば、これに抗して、孟子の性善が発せられた、宗門を争ふによる、といふ。程子の理、朱子の氣質は仏教との対抗から唱へられることになる。孔子は、この性を善とか悪とか言及しているわけではない。何を習うかにより、差がつく。徂徠は、故に、学を勧むるを謂ふとする。これは次条と関連する。  
読書会：[2009年8月2日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html)

３）子曰唯上知與下愚不移

zǐ yuē wéi shàng zhì yǔ xià yú bù yí  
子の曰はく、唯だ上知と下愚は移らず。  
  
先生が申された。唯だ、上知と下愚は移らない。  
■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)に、「此れ上章を承けて言う。人の氣質相近きの中、又美惡一定して、習いの能く移す所に非ざる者有り。○程子曰く、人の性は本善なり。移す可からざる者有るは、何ぞや。其の性を語れば、則ち皆善なり。其の才を語れば、則ち下愚の移らざること有り。謂う所の下愚に二つ有り。自暴自棄なり。人苟も善を以て自ら治むるときは、則ち移る可からざること無し。昏愚の至りと雖も、皆漸磨して進む可し。惟自暴者は、之を拒みて以て信ぜず。自棄者は、之を絶ちて以て爲さず。聖人與に居ると雖も、化して入るること能わざるなり。仲尼の謂う所の下愚なり。然れども其の質は必ずしも昏且愚に非ず。往往強戾にして才力人に過ぐる者有り。商辛、是れなり。聖人其の自ら善を絶つを以て、之を下愚と謂う。然れども其の歸を考えれば、則ち誠に愚なり。或ひと曰く、此れ上章と當に合わせて一と爲すべし、と。子曰の二字、蓋し衍文なるのみ、と。」ある。[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、氣には清濁が有り、稟（生まれつき）淳清を得る者が聖人、もし淳濁を得る者は愚人とする。淳濁はいくら澄ましても清とはならず、淳清は撹拌しても清で濁とはならない。上聖は昏乱の世にあっても眞を撓（かきみだ）すことはない。下愚は堯や舜と出会い一緒にいてもその悪を変へることはない。だから「上知與下愚不移」といふ。多清少濁、あるいは多濁少清、あるいは半清半濁であれば善と共に居れば清、悪と共に居れば濁に近づく、といふ風に見る。■　[雍也篇19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）に、「中人以上には以て上を語るべし、中人以下には以て上を語るべからず。」[泰伯篇9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taihaku.htm)）に「民これに由らしむべし。これを知らしむべからず。」とあるごとく、徂徠は、「善悪を以てこれを言はず。」「その性の殊（こと）なるを言ふなり。」とする。  
読書会：[2009年8月2日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html)

４）子之武城聞弦歌之聲夫子莞爾而笑曰割雞焉用牛刀子游對曰昔者偃也聞諸夫子曰君子學道則愛人人學道則易使也子曰二三子偃之言是也前言戲之耳

zǐ zhī wǔ chéng wén xián gē zhī shēng fū zǐ wǎn ěr ér xiào yuē gē jī yān yòng niú dāo zǐ yóu duì yuē xī zhě yǎn yě wén zhū fū zǐ yuē jūn zǐ xué dào zé ài rén xiǎo rén xué dào zé yì shǐ yě zǐ yuē èr sān zǐ yǎn zhī yán shì yě qián yán xì zhī ěr

子武城に之きて弦歌の聲を聞く。夫子、莞爾として笑ひて曰はく、雞を割くに焉ぞ牛刀を用ゐん。子游對へて曰く、昔し偃や諸を夫子に聞けり。曰はく君子道を學べば、人を愛す。小人、道を學べば、使ひ易し。子の曰はく、二三子、偃の言、是なり。前の言これ戲るるのみ。  
  
先生が武城に之（ゆ）くと、子游の弟子達が琴瑟を弾き詩を唱和しているのが聞こえてきた。先生は笑みをうかべて揶揄された。雞を割（さ）くに牛刀を用ゐるとはね。子游が對へて言った。昔し偃（私）は先生からこう教わりました、「君子は道を學んで人を愛す、人は道を學べば使ひ易し。」と。先生が言われた。二三子（諸君）偃の言ったことは、このことであった。前言は戲れにすぎぬ。  
■　武城は、[雍也篇12](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）にあったが、費の南西、沂水（きすい）沿いにあり、呉、越に通じる要所、子游が宰相であった。澹臺滅明を用いたが先生は善しとされず、後に、先生がこの失敗を認めるという話があった。孔子より少（わか）きこと45歳、子張より4歳上、子夏より１つ下、鋭い感覚の持ち主であった。■　之は行く、至ること。■　弦歌之聲は琴瑟に合わせて詩を歌う人の声、子游がそういふ教育を施していた。■　莞爾は、少しく笑う、にやりとされた。■　割雞焉用牛刀、雞は武城、牛刀は弦歌之聲を行う禮樂。小さな武城の邑に正式の禮樂の教育を施すのは大仰。皇侃は晋の繆播（びゅうはん）の説として、牛刀は子游、大きな才能があるのに、小さな武城の邑にのごときに用ゐるのは惜しいといふ感慨がある、とみる。雞を解体するに牛刀を用いるは場違ひな取り合はせ、武城は名の通り、呉、越に備える軍事拠点、これに弦歌は不釣合いなものがあった。若い子游が自分が来た事で格好をつけたものかとたしなめようとされた。ところが子游は真直ぐにこれを実践していた。それは、先生自身が教えて下さったことです、この地には澹臺滅明のごとき君子も居れば、そうでない人も居る。■　君子學道則愛人人學道則易使、[憲問43](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kenmon.doc))に「上好禮則民易使也」とあった。この場合の學は、詩と樂、愛人は結びつくが、易使とはどう結びつくのか？易使とは人を使い易くなるといふよりは、禮の場合には約束事が共通すること、詩と樂の場合には気持ちが通じることを想定しようか。子游の志を知り、孔子は、子游はこれが言いたかったのだ、戯れであった、と前言を改めた、過ちを改むるに憚ることなかれとはこのことであった。また、一本子游にとられた。  
読書会：[2009年8月2日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html)

５）公山弗擾以費畔召子欲往子路不說曰末之也已何必公山氏之之也子曰夫召我者而豈徒哉如有用我者吾其為東周乎

gōng shān fú rǎo yǐ bì pàn zhào zǐ yù wǎng zǐ lù bú yuè yuē mò zhī yě yǐ hé bì gōng shān shì zhī zhī yě zǐ yuē fú zhào wǒ zhě ér qǐ tú zāi rú yǒu yòng wǒ zhě wú qí wéi dōng zhōu hū  
公山弗擾、費を以て畔（そむ）く。召（よ）ぶ。子往（ゆか）んと欲す。子路說（よろこ）ばずして曰く、之(ゆく)こと末（な）きのみ。何ぞ必しも公山氏に之かむや。子の曰はく、夫れ我を召ぶ者にして、豈に徒（ただ）ならんや。如し我を用ゐる者有らば、吾、其れ東周を為（せん）か。  
  
公山弗擾が、費を以て畔いく。先生を召し、先生は往こうとされた。子路は說ばず、こう言った。ゆくことなぞありますまい。どうして公山氏のところへ行かねばならないのですか。先生が申された。私を呼ぶといふことはどうして無駄足を運ばせようか（私に期待するところがあるからだろう）。もし、(本当に)私を用いるならば、私はこの東において（費において）周の政治を行ってみせようものを  
■　公山弗擾は左伝では公山不狃、費の宰をしており、季寤（ご：季桓子の弟）、公鉏極（季氏の族員）とともに陽貨に力を借りて季桓子に叛いた。そして、孔子を招聘しようとした。定公8年（BC502）孔子50歳。陽貨に対しては気おされるところがあったが、その子分となる公山弗擾に対しては、それを感じていないようである。むしろ、自分が出掛けて力になろうとさえしている。■　末之也已は之（ゆく）末（な）くんば已（や）むと読むのが古注、吉川先生はこのほうが味わいが深いとされる。子路は先生は少し甘いと警戒をしていた。■　夫召の夫は意味を強める助字。徒は徒労の徒、いたずらに、無目的、無効果。公山弗擾のような季氏でうだつがあがらない人間であれ、すべて私を召（よ）ぶ者は、それなりのことがあってのこと、決して無駄なことはない。私に期待するところがあってのこと。■　東周は周の道を東で興すこと、もし私を用いることができるなら、周の政治をこの費から再興してみせようものを、五十にして天命を知ると意気軒昂なる先生の姿があった。子路は危なっかしくみていたのであろう。

読書会：[2009年8月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年8月8日)

６）子張問仁於孔子孔子曰能行五者於天下為仁矣請問之曰恭寬信敏惠恭則不侮寬則得眾信則人任焉敏則有功惠則足以使人

zǐ zhāng wèn rén yú kǒng zǐ kǒng zǐ yuē néng xíng wǔ zhě yú tiān xià wéi rén yǐ qǐng wèn zhī yuē gōng kuān xìn mǐn huì gōng zé bù wǔ kuān zé dé zhòng xìn zé rén rèn yān mǐn zé yǒu gōng huì zé zú yǐ shǐ rén

子張仁を孔子に問ふ。孔子の曰はく、能く五者を天下に行はば仁を為す。之を請ひ問ふ。曰はく、恭、寬、信、敏、惠、恭ならば則ち侮らず。寬ならば則ち眾を得る。信ならば則ち人任す。敏ならば則ち功有り。惠ならば則ち以て人を使ふに足る。

子張が仁を孔子に問ふた。孔子がこう申されたそうである。五つのことを世の中できちんと行ふことでできれば、仁を為すことになる。それはどうすればいいのですか、是非にもお聞かせ下さいと子張が言ふと、こう申された。恭、寬、信、敏、惠の五つである。恭（うやうや）しくすれば、侮られることはない。寬（おおら）かであれば眾を得る、人があつまる。信（まこと）あれば人は任かせる、頼られる。敏（すみや）かであれば功をあげ、役職につく。惠（相手の立場にたつ）すれば人を使ふに足る、人は使われることに満足する。  
■　子張問仁於孔子　昔こんなことがあったと回顧している、あるいは伝聞したことを述べている印象がある。■　孔子は仁とは何かではなく、「能行五者於天下為仁矣」と何を行へば仁を為すことになるかと返答された。■　請問之　顔回が「請問其目（[顔淵篇1](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）」と問ふたのに比して、子張が発した言葉とされる。子張は孔子より少（わか）きこと48歳、子夏と比して、「過ぎるは及ばざるが如し」と評される勝気の俊才とされた。徂徠は、「孔子仁を行ふを以て之に告ぐ、孔子天下を以て告ぐる者は惟（た）だ顔子、子張のみ」と高い評価を与えた。これは、学ぶ者が天下において仁をなすといふ観点である。■　堯曰篇に、「寬なれば則ち眾を得、信なれば則ち民任じ、敏なれば則ち功有り、公なれば則ち說ぶ」とある。公は恵の間違ひとする説があるが、この場合は、為政者としての心得であり、公もままで、民が君主として信任し、公平であれば民がよろこぶ、となろう。また、堯曰篇に、「君子は惠して費（つい）えず。勞して怨（うら）みず。欲して貪（むさぼ）らず。泰（ゆたか）にして驕（おご）らず。威にして猛（たけ）からず。（五美）」惠とは「民の利とする所に因りて利す。」とあり、相手の立場にたつこと。勞は「勞すべきを擇（えら）んで勞す。」とあり自らその労苦を果たすを使命とする。欲は「仁を欲して仁を得る。」とあり伯夷・叔斉のごとき心境。泰は「君子、眾寡無く、小大無く、敢へて慢（あなど）る無し。」とあり富貴・貴賤にかかわらずおおらかに対応すること。威は「君子、其の衣冠を正し、其の瞻視（せんし）を尊び、儼然たり、人望みて畏る。」とある。これも為政者としての心得である。

読書会：[2009年5月14日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月14日)

７）佛肸召子欲往子路曰昔者由也聞諸夫子曰親於其身為不善者君子不入也佛肸以中牟畔子之往也如之何子曰然有是言也不曰堅乎磨而不磷不曰白乎涅而不緇吾豈匏瓜也哉焉能繫而不食

bì xī zhào zǐ yù wǎng zǐ lù yuē xī zhě yóu yě wén zhū fū zǐ yuē qīn yú qí shēn wéi bú shàn zhě jūn zǐ bú rù yě bì xī yǐ zhōng móu pàn zǐ zhī wǎng yě rú zhī hé zǐ yuē rán yǒu shì yán yě bù yuē jiān hū mó ér bú lìn bù yuē bái hū niè ér bù zī wú qǐ páo guā yě zāi yān néng xì ér bù shí  
佛肸（ひっきつ）召（よ）ぶ。子往（ゆか）んと欲す。子路が曰く、昔し由は諸を夫子に聞く。曰はく、親（みずから）其の身に於て不善を為すは、君子は入らざる。佛肸中牟（ちゅうぼう）を以て畔（そむ）く。子のこれに往くこと、これを如何。子の曰はく、然り是の言有り。堅きを曰はずや、磨（とく）として磷(うすろ)からず。白きを曰はずや。涅（くり）にすれども緇（くろ）からず。吾れ豈に匏瓜（ほうか）ならんや。焉ぞ能く繫(つ)きて食（く）らはざる。  
  
佛肸が孔子を召した。先生は往こうとされた。子路がこういった。昔し、由（私）は先生からこう聞きました。親（みずから）その身に不善を為す所には、君子は立ち入らない。佛肸は中牟を手中にし、（晋に）畔(そむ)いている。そのような所に往（ゆ）き何をどうされようというのですか。先生が申された。そのとおり。しかし、こういう言葉がある。「堅いといふべきではないか、いかに磨けども磷(うす)くならぬなら。白いといふべきでないか、いかに涅（黒く染）めれども緇（くろ）くならぬなら。」私が匏瓜、どうして、一人でいようか、こんなに沢山ぶら下がっているだけで食はずとは  
■　左伝によれば、哀公5年（BC490年）趙鞅（趙簡子）が衛を攻める。衛が范氏を援助したためで、ついで中牟を包囲した、とある。ところで趙簡子は亡命してきた陽貨を受け入れた人物であった。晋では趙簡子と范氏ならびに中行氏が対立しており、衛や斉は范氏、中行氏を援助していた。佛肸は范氏の臣、中牟の宰相、中牟を以て畔く、とは、中牟は元来は晋の地であるが、佛肸がこれを手中におさめ、衛に帰したこと。孔子はその時、衛の霊公より俸禄を得て仕へる予定で衛に居たが、南子の件や近臣の反対で結局用いらないでいた。そこに佛肸から声がかかった。孔子はそれに乗ろうとした。手に入る俸禄が手に入らぬとなれば、弟子を抱えてのこと、他に金策も必要となろう。■　子路は、反対した。定公8年（BC502）12年前、公山弗擾が費で畔き孔子を召し、孔子がゆこうとしたことがあった。定公12年（BC498年）この公山弗擾は孔子が子路を使って季氏の武力解除を行ったとき、費の軍勢を率い曲阜を攻める挙に出、二人は苦い目にあっている。これを破り、費の武装解除には成功するが、この後、成の武装解除に関しては公斂処父（こうれんしょほ）に阻まれ、三桓氏の武装解除に失敗し、孔子は魯を出る羽目となっている。その教訓が「不善を為すところには君子は入らない」、不義なものには加担しない。佛肸は、晋からも、衛からも距離をおいて新しい国を造りたい、孔子よ、手伝ってくれということであろうが、動機は陽貨や公山弗擾と変はらない、先生には合わない、と子路は直感的に判断していた。■　磨而不磷、磨は研磨、磨くこと、磷は薄くなること、磨いても磨いても薄くならないもは堅い。■　涅而不緇、涅は黒土からとった染料で黒く染めること、緇は黒く染められた絹糸。黒染料で染めても黒くならないのは白い。孔子は私の志は堅く、穢れがない、断固として佛肸を使いこなしてみせる、と謂ふ。■　匏瓜、瓜の一種、[マクワ](http://www2.mmc.atomi.ac.jp/web01/Flower%20Information%20by%20Vps/Flower%20Albumn/ch4-vegitables/makuwa.htm#uri)系は実が甘い。匏がつくのは[ヒョウタン](http://www2.mmc.atomi.ac.jp/web01/Flower%20Information%20by%20Vps/Flower%20Albumn/ch4-vegitables/hyotan.htm#lagenaria)系で食用でなく、外皮が堅く、割って柄杓、椀にする。味が苦くて食べにくいとなれば、[トウガン](http://www2.mmc.atomi.ac.jp/web01/Flower%20Information%20by%20Vps/Flower%20Albumn/ch4-vegitables/tougan.htm)系。天に一人かかる匏瓜星（ほうかぼし）は、牽牛星のように孤独だとされる。能繫、よくぶらさがったままで、と釈されるが、匏瓜が一個ぶら下がるイメージではなく、実際は沢山ぶら下がっている。そこで、匏瓜は実際役に立つ、私一人でも役に立つのに、一人じゃなく弟子も沢山いる、それなのに食べるものはいない。だけど佛肸は食うと言ってきているではないか、行ってみてはどうか、子路よ。と解してみた。孔子教団としてみれば、何等かの事態打開の一手が必要であったのかもしれない。

読書会：[2009年8月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年8月8日)

８）子曰由也女聞六言六蔽矣乎對曰未也居吾語女好仁不好學其蔽也愚好知不好學其蔽也蕩好信不好學其蔽也賊好直不好學其蔽也絞好勇不好學其蔽也亂好剛不好學其蔽也狂

zǐ yuē yóu yě rǔ wén liù yán liù bì yǐ hū duì yuē wèi yě jū wú yù rǔ hào rén bú hào xué qí bì yě yú hào zhì bú hào xué qí bì yě dàng hào xìn bú hào xué qí bì yě zéi hào zhí bú hào xué qí bì yě jiǎo hào yǒng bú hào xué qí bì yě luàn hào gāng bú hào xué qí bì yě kuáng

子の曰はく、由や、女（なんじ）は六言（りくげん）の六蔽（りくへい）を聞くや。對へて曰く、未だし。居れ、吾れ女に語（つ）げん。仁を好みて學を好まざれば、其の蔽は愚（ぐ）。知を好みて學に好まざれば、其の蔽は蕩（とう）。信を好みて學を好まざれば、其の蔽は賊（ぞく）。直を好みて學を好まざれば、其の蔽は絞（こう）。勇を好みて學を好まざれば、其の蔽は亂（らん）。剛を好みて學を好まざれば、其の蔽は狂（きょう）。

先生が申された。由や、汝は六言六蔽を聞いているか。對へて、「未だし」と曰（い）ふ。居（すわ）れ、汝に告げん。仁を好みながら學を好まないと、その弊害は愚となる。知を好んで學を好まないと、その弊害は蕩となる。信を好んで學を好まないと、その弊害は賊となる。直を好んで學を好まないと、その弊害は絞となる。勇を好んで學を好まないと、その弊害は亂となる。剛を好んで學を好まないと、その弊害は狂となる。

■　女は汝のこと。■　六言六蔽、言とは仁、知、信、直、勇、剛であり蔽は、愚、蕩、賊、絞、亂、狂。[集註](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、「六言は皆美德なり。然れども徒（ただ）之を好みて、學んで以て其の理を明らかにせざれば、則ち各々蔽われる所有り。愚は、陷れらるる可く罔いらるる可きの類の若し。蕩は、高きを窮め廣きを極めて止まる所無きを謂う。賊は、物を傷害するを謂う。勇は、剛の發するなり。剛は、勇の體なり。狂は噪率なり。○范氏曰く、子路善をするに勇む。其の之を失するは、未だ學を好み以て之を明らかにすること能わざればなり。故に之に告ぐるに此を以てす。曰く勇、曰く剛、曰く信、曰く直は、又皆其の偏を救う所以なり、と。」とする。蔽は、「遮ぎ遮り掩うなり。」とする。[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は「若不學而行事、猶無燭夜行也」、もし、学ばずして行うは、燭なくして夜行するがごとし、とみている。六言六蔽という諺があったのであろう。■　居吾語女は、集註に、「禮に、君子問うこと端を更（あらた）むれば、則ち起ちて對う、と。故に孔子子路に諭して、坐に還らしめて之に告ぐ。」とあり、子路が立ち上がって、考えあぐねるよりは、勇をもって直におこなうべしとでも進言したところ、孔子が、六言六蔽を聞いているかと返され、聞いていないといふので、居（自分の坐にすわ）らせて告げたことになる。弟子に諭すときの常套句。■　好は、「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を樂しむ者に如かず」の好。しかし、學ばざれば、好は自らの心をとんでもないところへと陥れるといふ。何を學ぶかとなれば、「耳順」「從心所欲、不踰矩」の境地であろう。仁と愚、知と蕩、信と賊、直と絞、勇と亂、剛と狂は紙一重、他人から見れば見分けがつかないかもしれない。本人は自覚できていなければならない。このころあいは、自らの失敗の経験に照らしてはじめて可能となる。■　愚、「大賢は愚なるが如し」、「回（顔回）違はざること愚なるが如し」、「邦に道無きときは則ち愚」、「柴（高柴）や愚なり」はおろかなこと。元来は、荘厳の風情であるが抜けていること。■　蕩、は勢いの盛んなこと、王道蕩々たり、はいい意味。「今の狂や蕩」（同篇16）の場合放蕩の蕩。知を極めんとしてどこまでも突き進む。■　賊は盟約を破棄することが原義、左伝に、「則を毀（やぶ）るを賊と為す」とある。信じていることが相手側では破棄されていること。■　絞は絞首の絞、糸を結びしめること、くびる、しめる、きびしいこと。直であることが相手の首を絞めあげることになる。■　亂は元来はもつれた糸をほぐして治めることであるがもつれ、みだれる意となった。勇が暴力となれば、乱暴、かえって事態がもつれる。■　狂は憑きものがおちないことが原義、孔門では狂簡は好まれた言葉、剛に憑かれたかのごとく暴ぶる。  
読書会：[2009年8月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年8月29日)

９）子曰小子何莫學夫詩詩可以興可以觀可以群可以怨邇之事父遠之事君多識於鳥獸草木之名

zǐ yuē xiǎo zǐ hé mò xué fú shī shī kě yǐ xīng kě yǐ guān kě yǐ qún kě yǐ yuàn ěr zhī shì fù yuǎn zhī shì jūn duō shí yú niǎo shòu cǎo mù zhī míng   
子の曰はく、小子、何ぞ夫（か）の詩を學ぶこと莫（な）きや。詩以て興（おこ）す可く、以て觀（み）る可く、以て群（ぐん）す可く、以て怨む可く、邇（ちか）くは之父に事（つこうまつ）り、遠くは之君に事る。多く鳥獸草木の名を識る。  
  
先生が申された。小子（諸君）、どうして夫の詩を學ばないことがあろうか？詩は情（こころ）を興すことができ、風俗を觀ることができ、群して生きることができ、怨みを共感することができる。家にあっては父に仕え、世に出ては君に仕える。鳥獸草木の名を多く識る。  
■　小子門人也、ここでは弟子のこと。郷党における師と小子の関係を取り入れている。「吾黨之小子狂簡（[公冶長篇](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)22）」「非吾徒也小子鳴鼓而攻之可也（[先進篇16](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/senshin.doc)）」■　何莫學夫詩、莫は無、夫の詩とは、頌（廟歌）、雅（公事、宴席歌：大雅、小雅）、風（民謡）に分かれ、賦（感想をそのまま歌う）・比（喩へて歌う）・興（物にふれて歌う）、詩経のこと。詩は志の之く所、心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す。これを言ひて足らず、故に、嗟嘆す。これを嗟嘆して足らず、故に、詠歌す。詠歌して足らず、手のこれを舞ひ、足のこれを踏むを知らざる。情は声に発し、声は文を為す、これを音と謂ふ。言葉と音楽と舞からなる。正統で伝統的な教養。当時、乱れた音曲が流行していたとされ、明治においては、俳句、近代詩や民謡、唱歌の流行のごときもの、万葉集や古今集、雅楽をどうして学ばないことがあろうか、といっても時代の変革期にはむつかしい。孔子は周公、召公の心が失われることを危惧しておられた。■　可以興、孔安国は興を引譬連類（譬を引いて類を連ねる）、比喩と連想による婉曲な伝達法、自己の心情の比喩的表白とされる。左伝では、使者が口上で詩を引用して、その意図を婉曲に伝える、詩の素養がないと、この時何を示唆されたかが分からず、面目を失うことになる。素晴らしい詩で返すと、相手もなかなかの人物と感服する。それ故、冒頭の暗喩ともされ、自らの気持ちを興し、相手の気持ちを興す、誘いかけでもある。婉曲な伝達法とされるが、詩は情をストレートに表すものであり、詩に託すは、本音を伝達する手段でもあった。■　可以觀、觀は、鄭玄は、風俗の盛衰を観る、集註は、考見得失、とする。吉川先生は、自らは経験しない事柄を、あたかも、したしく経験したごとくに感じ、感じたことを考える、文学の効用とされる。■　可以群、集註は、和而不流、吉川先生は、群居して担い切磋す、和して流れず。詩、小雅、吉日に、「或いは群れし或いは友とす」とあり、情や志を共にすることであろうか。■　可以怨、孔安国は、上の政を怨み刺（そし）る、集註は、怨而不怒とする。吉川先生は、やり場のない個人的な感情の発散、とされる。怨みを情の重要な源として、これを晴らす術を見出したのは、政治的な知恵であり、文芸のよりどころの重要な部分となったのかもしれない。■　邇之事父遠之事君、詩を学ぶことは父や君に仕える心を養う。なかなか仕えることは難しい。[子路篇5](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/siro.doc))に「詩三百を誦して、これを授くるに政を以てして達せず、四方に使ひして專り對ふること能はず。多しと雖も亦奚を以て為さむ。」家庭にあっても、世にでても、詩が指針となる。吉川先生は、中国における文学の価値の定位は、この条にはじまる、とされる。後世、墨子の非樂、道家の人為的文明否定といふものにさらされ、そういった摩擦をこえて生まれたもの、また、孔子の言葉として、これは教条的で、列挙的、抽象的で伝わりにくい、とも見ておられる。■　詩の中には、草50種、木52種、鳥36種、獣24種、魚14種、虫18種に言及される。名と実をきちんと合致させる。  
読書会：[2009年8月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年8月22日)

10）子謂伯魚曰女為周南召南矣乎人而不為周南召南其猶正牆面而立也與

zǐ wèi bó yú yuē rǔ wéi zhōu nán shào nán yǐ hū rén ér bù wéi zhōu nán shào nán qí yóu zhèng qiáng miàn ér lì yě yú  
子、伯魚に謂ひて曰はく、女（なんじ）周南、召南を為（まなび）たりや。人として周南召南を為ばずんば、其れ猶ほ正（まさ）しく牆（かき）に面して立つごときか  
  
先生が伯魚に謂って申された。お前は周南、召南を学びましたか。人として周南召南を学ばねば、まあまさしく牆に向かって立っているようなものじゃないか。  
■　伯魚は孔子の長男、清朝の劉宝楠によれば、時あたかも、伯魚が結婚しようとしていたといふ。「風（詩の国風）の始めは、天下を風化して夫婦を正す所以なり。」とある。■　周南召南、周は周公旦（たん）、召は召公奭（せき）、周公は聖人、召公は賢人とされ、南とは「二公の徳教の、岐（周の本拠地）よりして南国に行はるゝを言ふなり。」とされる。周南の首（はじめ）は「關雎（[かんしょ](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/shikyou/shikyou_1_kokuhuu_main.html)）」、召南の首は、「鵲巢（[しゃくそう](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/shikyou/shikyou_1_kokuhuu_main.html)）」。關雎は、「（周の文王の）后妃・夫人に斯の徳有り、興(た)ちて其の君子を助くれば、皆な以て功を成し嘉瑞を獲るに至る可きを言ふ。風の始めは、天下を風化して夫婦を正す所以なり。故に周公は楽を作り、之を郷人に用ゐ、之を邦国に用ふるなり。或は之を房中の楽と謂ふ者は、后妃・夫人の其の君子に侍御し、女史の之を歌ひて以て義序を節するが故なるのみ（[毛詩](http://homepage.mac.com/two_yossy/fang-hu_island/01-keibu/03-sika/001-0-mousi_01.html)）」。[八佾20](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）に孔子は、「關雎は樂しみて淫（いん）せず、哀しみて傷（やぶ）らず。」と述べている。鵲巢は、鵲（かささぎ）の巢に鳩が来りて卵を産むごとく、君子の所に淑女が嫁ぎ、一家が満ち足りることを歌ふ。婚姻における夫婦の情が歌はれるが、周南、召南における君子と淑女の婚姻とは、我が国でいえば、皇室、幕府、諸藩主における夫婦愛を手本にするようなものであり、中国にあっても諸侯までの世界で士大夫にはそぐはない。禮記、[檀弓](http://chinese.dsturgeon.net/text.pl?node=9596&if=gb)(上)に、「孔氏の出母に喪せざるは、子思（伯魚の子、孔子の孫）よりはじまる。」とある。出母とは家を出た母、子思の子が子上（白）、子思は、自分の妻であってこそ白の母、妻でなくなれば白の母ではないので、喪に服することはない、とした。どうやら、孔家は、子をもうけて後に妻を離縁したようである。多くの弟子を有する孔家の妻といふ立場が非常にむつかしいものであったと思はれる。孔子は19歳で幵官（けんかん）氏の娘と結婚して、20歳で伯魚を得ている。娘を公冶長に嫁がせており、一男一女の父であった。その後の亡命や放浪をみれば、普通の結婚生活は続かず、出母となったのであろう。孔子は妻の喪を行ったが、子思の妻以降は、出母に喪せざるとなったようである。孔子は子の伯魚に円満な結婚生活を送って欲しかったのかもしれない。■　牆面而立、牆は土を固めて作った垣、牆面而立は、土垣に向って立つ、そこから中に入ることはできない。嵩山の少林寺で壁に向かって九年間座禅し続けて悟りをひらいた達磨という人がおられるが、これは例外中の例外。前に進めないのは、目には見えない垣にぶつかっているからで、周南召南という門から入りなさい、となろうか。  
読書会：[2009年8月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年8月22日)

11）子曰禮云禮云玉帛云乎哉樂云樂云鍾鼓云乎哉

zǐ yuē lǐ yún lǐ yún yù bó yún hū zāi yuè yún yuè yún zhōng gǔ yún hū zāi   
子の曰はく、禮と云ひ禮と云ふ。玉帛（ぎょくはく）を云はんや。樂（がく）と云ひ樂と云ふ。鍾鼓（しょうこ）を云はんや。  
  
先生が申された。これは禮か？これが禮だ、と云ふが玉帛のことを云ふばかり。これは樂か？これが樂だ、と云ふが鍾鼓のことを云ふばかりではないか。  
■　玉帛、書経、[舜典](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shun.htm#JiWuRui)に、「五禮を修め、五玉三帛二生一死を贄とす。」　五禮とは、吉、凶、軍、賓、嘉の礼。五玉とは、天子が諸候に与える玉器、公には桓圭、候には信圭、伯には躬圭、子には穀璧、男には蒲璧を与える。三帛とは、纁（ももいろ）、玄（黒）、黄で、それぞれ諸候の世子、三公の公子、附庸（属国）の君主が帝に献上する帛。二生は生きている小羊と雁で、それぞれ卿、大夫が帝に献上する牲。一死は死んだ雉で士が帝に献上する。贄は、年長者を訪問するときに贈る礼物。五器は礼が終われば、諸候に返す。三帛二生一死は返さない。禮と云うと、こういう知識、作法についてばかり論じている。■　鍾鼓、書経、[舜典](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shun.htm#DiYueChouRuo)に、「詩は志を言ふ。歌は言を永（えい）ず。聲（せい）は永（なが）きに依り、律は聲を和す。八音克（よ）く諧（かい）す。相ひ倫を奪する無くば、神人以て和す。」とある。聲とは磬（石を連ねた打楽器で音階を奏す）の初形、五聲（宮（ソ）、商（ラ）、角（シ）、徴（レ）、羽（ミ）（ドは変徴、ファは変宮）とされる）がある。永とは音階、抑揚、長さをあらわすのであろう。律は陰陽があり、陽は六律（黄鐘（ニ）、太蔟（ホ）、姑洗（嬰ヘ）、蕤賓（嬰ト）、夷則（嬰イ）、無射（ハ））、陰は六呂（太呂（嬰ニ）、夾鐘（ヘ）、仲呂（ト）、林鐘（イ）、南呂（ロ）、応鐘（嬰ハ））、和音をいうのであろう。八音は、楽器の種類で、塤（土）、管（竹）、鼓（皮）、笙（匏）、弦（糸）、磬（石）、鐘（金）、祝敔（木）。克諧はよく和合すること。倫とは相次第して全体として一つの秩序をなすもの、これを乱すことなくば、樂により神人が和す。樂理や楽器について論じるばかりである。禮樂の本質を置き忘れていることを言うものであろうが、玉帛、鍾鼓を修めることを前提としており、その修養なくしては、詩三百を読まずして詩を語るに等しい。平成に生きる人間が、玉帛、鍾鼓、詩三百を修めることは、まず在りえず、理解するには限界がある。■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「敬して之を將（おこな）うに玉帛を以てするを、則ち禮と爲す。和して之を發するに鐘鼓を以てするを、則ち樂と爲す。其の本を遺（わす）れて專ら其の末を事とするは、則ち豈禮樂の謂ならんや。○程子曰く、禮は只是れ一箇の序なり。樂は只是れ一箇の和なり。只此の兩字、多少の義理を含み蓄う。天下一物として禮樂無しということ無し。且此の兩椅を置くが如し。一つが不正なれば、便ち是れ序無し。序無くば便ち乖（そむ）き、乖かば便ち和せず。又盜賊の如きは至って不道を爲す。然れども亦禮樂有り。蓋し必ず總屬有り、必ず相聽順して、乃ち能く盜を爲す。然らざれば則ち叛亂して統無く、一日も相聚まりて盜を爲すこと能わざるなり。禮樂は處として之れ無しということ無し。學者須く識得せんことを要す、と」する。樂記に曰く、「治世の音は、安らかにして以て樂し。其の政ととのえばなり。乱世の音は、怨みて以て怒る。其の政乖（そむ）けばなり。亡国の音は、哀しみて以て思う。其の民くるしめばなり。声音の道は、政と通ず」。[八佾篇25](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）に曰く、「韶（舜の樂）は美を盡し又善を盡すなり。謂ふ。武（武王の樂）は美を盡すも未だ善を盡さざるなり」。孔子は、人間社会を人間社会たらしめるものが禮、神、先祖と和すものが樂という伝統に、「詩に興り、禮に立ち、樂に成る（[泰伯篇8](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taihaku.htm)）」、「人にして仁ならずば禮を如何、人にして仁ならずば樂を如何（[八佾篇3](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）」と、人としてあるべき禮樂は仁の心を以て行われるという考えを導入した。  
読書会：[2009年9月5日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年9月5日)

12）子曰色厲而內荏譬諸小人其猶穿窬之盜也與

zǐ yuē sè lì ér nèi rěn pì zhū xiǎo rén qí yóu chuān yú zhī dào yě yú   
子の曰はく、色厲（はげ）しくして內荏（やわらか）なる。諸を小人に譬うれば、其れ猶（な）を穿窬（せんゆ）の盜のごときになるか。  
  
先生が申された。顔色は厳めしく、内心は柔弱。これを小人に譬へれば、まあ謹厳な顔つきをしていながら、人が居ないとなると、こっそり隙間や塀を越えて忍び込み盗むようなものか。

■　色厲、顔色が厳めしいこと。■　内荏、内心が柔弱なこと。■　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)に曰く、「小人盜を爲すに、或は屋壁を穿（うが）ち入り、或は垣墻を踰（こ）え入る。當（まさ）に此の時、外形恆（つね）に進みて物を取るを欲して心恆に入るを畏る。常に退走の路を懷（おも）ふ。是れ形進みて心退く、内と外相乖（そむ）くは、色外に矜正（きんせい）にして心内に柔佞（じゅうにん）なる者の如し」。窬は字形からすれば、塀に穴をあけることであるが乗り越える方がた易い。密かに盗むこと。■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、厲は威嚴なり。荏は柔弱なり。小人は細民なり。穿は壁を穿（うが）つ。窬は牆を踰（こ）ゆ。其の實無く名を盜んで、常に人の知らんことを畏るるを言うなり、とする。  
読書会：[2009年9月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年9月10日)

13）子曰郷原德之賊也

zǐ yuē xiāng yuàn dé zhī zéi yě  
子の曰はく、郷原は德の賊なり。  
  
先生が申された、郷原は德を賊（そこな）ふものだ。

 ■　この口調では郷党では郷原という人が称せられていたと思はれる。原は愿yuàn、慎みて真面目なこと。願う、許す意味があり、表面上は謹厳実直にみえるが、物わかりがよいことで称される人とされる。ところが、孟子、尽心篇で、孔子は口をきわめて郷原を嫌ったといふ。[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)では、郷を向xiāngと見て、人に謂ひて能く剛毅ならずして面從を好み、人を見て輙（その都度）媚向(相手に媚びて)、原趣（相手の意向を容れ）、求合（相手に合はそうと）する、此れ是れ徳を賊（そこな）ふなり、ともする。前条と関連し、見かけは真面目、中身はぐにゃぐにゃとなる。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、郷者は鄙俗（田舎者）の意。原は愿と同じ。荀子の原愨（げんかく）、註に讀んで愿に作る、と。是れなり。郷原は、郷人の愿なる者なり。蓋し其の流を同じくして汙に合わせ以て世に媚ぶ。故に郷人の中に在りて、獨り愿を以て稱せらる。夫子其の德に似て德に非ずして、反って德を亂るを以て、故に以て德の賊と爲して、深く之を惡（にく）む。詳（つまび）らかに孟子の末篇（尽心篇）に見えたり、とする。巧言令色鮮いかな仁である。人に媚びるも世に媚びるも郷原とする。[雍也篇17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）に孔子曰く、「人の生まるや直（なお）し、これを罔(な)くして生くるや幸にして免る」。己の人生を素直に生きようではないか、己を欺き、人を欺いて生きたとしても、死を免れたにすぎない。先生は世におもねることも、世をすねることも排し、己を生きようとされた。  
読書会：[2009年9月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年9月10日)

14）子曰道聽而塗説德之棄也

zǐ yuē dào tīng ér tú shuō dé zhī qì yě  
子の曰はく、道に聽きて塗に説くは德を之棄つるなり。  
  
先生が申された。道で聽いたことを塗（途中）で説くことは、德を棄てることになる。  
■　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、道は道路なり、塗もまた道路なり。記これを問ふ、學足らずして以て人の師と爲す、人の師、必ず當に温故而知新、研精して久しく習ひ、然る後、乃ち人に傳説す可べきのみ。若し、これを道路で聽き、道路仍ち即人に傳説すは、必ず謬妄（びゅうもう）多し。有徳者が棄つらる所の所以となすなり。亦自ら其の徳を棄るなり。江熙の云く、今の學者己のために為さずは、况や道に聽く者か、逐に末だ愈（まさ）らぬこと甚し、徳を棄ること彌（いよいよ）深し、とする。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、善言を聞くと雖も、己が有とせず。是れ自ら其の德を棄つるなり。○王氏曰く、君子多く前言往行を識りて、以て其の德を畜う。道に聽いて塗に說くは、則ち之を棄つるなり、と。先生から聞いたことを中途半に他人に教える行為は、自分のみならず先生をも貶めることになる。よく習い、実践し、会得することが先、行いひて後言ふことを求められた。  
読書会：[2009年9月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年9月10日)

15）子曰鄙夫可與事君也與哉其未得之也患得之既得之患失之苟患失之無所不至矣  
zǐ yuē bǐ fū kě yǔ shì jūn yě yú zāi qí wèi dé zhī yě huàn dé zhī jì dé zhī huàn shī zhī gǒu huàn shī zhī wú suǒ bú zhì yǐ   
子の曰はく、鄙夫（ぴふ）、與（とも）に君に事（つかふま）つる可しや。其の未だ之を得ざれば、之を得んことを患（うれ）ふ。既に之を得れば之を失はんことを患ふ。苟（いやしく）も之を失ふを患ふれば、至らざる所無し。  
  
先生が申された。鄙夫と與に君に事（つか）へることはできようか、できまい。仕官できぬと士官したいと心患はし、仕官してしまえば、失ふことに心患はし、苟も失ふことに心患はしては、あちこち顔つなぎせぬところはない。  
■　鄙夫は凡鄙の人、周礼では、五家を隣、五隣を里、四里を酇（さん）、五酇を鄙、五百家の聚落をいふ。鄙の反は都、都雅に対して鄙俗。辺鄙なこと。ひなびていること。■　可與事君、與yǔで共にする、共に君主に仕へること。■　與哉、與yúで疑問、反問、哉も疑問、反問の助詞、～しようか、いやできない。田舎者と一緒に君主に仕へることができようか、いやできない。■　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、患得之は、得る能はざるを患ふを謂ふなり。初め未だ君に事つるを得ざる時、恆（つね）に懃懃（ぎんぎん）として己が君に事つるを得る能はざるを患ふを言ふ。楚の風俗、其の言、此の如く語るなり。不得ざる患ふを呼びて、之を得るを患ふと爲すなり。得たいと心患うとは得られないことに心患う、この言い方は楚の風俗としている。辺鄙な楚のまわりくどい田舎者の心配事には付き合いきれないと云はんばかり。■　患失之は、不之を失はざるを患ふなり。既に君に事つるを得れば厭心生じ、故に己が之を遺失せざるを患なり。既に得失を患ふは不定に在り。此の鄙心、廻邪して至らざる所無し、或は亂るなり。■　無所不至、鄭玄は、その邪媚為さざるところ無し、とする。仕官すれば君主に飽きられたらどうしようと、あちこちに「よしなに」と贈答し媚び、顔つなぎをしないところはない。心乱れ、仕事どころじゃない、付き合いきれない。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、小しきなるときは則ち廱（よう）を吮（す）い痔を舐（ねぶ）るも、大いなるときは則ち父と君とを弑す。皆失わんことを患うるより生ずるのみ。○胡氏曰く、許昌の靳裁之（きんさいし）が言有りて曰く、士の品、大概三つ有り。道德に志す者は、功名を以て其の心を累わすに足らず、功名に志す者は、富貴を以て其の心を累わすに足らず、富貴に志すのみなる者は、則ち亦至らざる所無し、と。富貴に志すは、卽ち孔子の所謂鄙夫なり、とする。吮廱舐痔は悪性の膿を口で吸い痔を舐める、媚（こ）び諂（へつら）いの極致。弑君とまあ大仰な両端に朱子は譬へる。政治を行いて富貴を目指すを鄙夫と云うも厳しい。孔子は、これほど極端な言い回しをしてはいまい。政治を行うにおいて、常に上に認められることに汲々として、己の志を貫かぬなら、政治を志す値打ちがないと、弟子に嘆息しておられる。平成の世なら、民主主義であるからと世論におもねる公約を口にして、票になるならなんでもしないことはない、当選すれば、事情が変わりましてと反古にする。さような政治家にはなりなさんな、それは乱心、見ちゃおれない、と申されたようなものである。  
読書会：[2009年9月17日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年9月1７日)  
無所不至矣は、中国では、自分の得たものを失わないためには手段を選ばずに何でもする。手段を選ばずは「殺す」までゆくのが前提。あちこち顔つなぎをして保全を図るレベルではない。朱子も「小しきなるときは則ち廱（よう）を吮（す）い痔を舐（ねぶ）るも、大いなるときは則ち父と君とを弑す。」としている。六親不認ともいい、親兄弟六親等であれ容赦はない。

16）子曰古者民有三疾今也或是之亡也古之狂也肆今之狂也蕩古之矜也廉今之矜也忿戾古之愚也直今之愚也詐而已矣  
zǐ yuē gǔ zhě mín yǒu sān jí jīn yě huò shì zhī wú yě gǔ zhī kuáng yě sì jīn zhī kuáng yě dàng gǔ zhī jīn yě lián jīn zhī jīn yě fèn lì gǔ zhī yú yě zhí jīn zhī yú yě zhà ér yǐ yǐ   
子の曰はく、古者（いにしえは）、民三つの疾（やま）い有り。今は或ひは是れ之亡（な）し。古の狂は肆（し）、今の狂は蕩（とう）。古の矜（きょう）は廉（れん）、今の矜は忿戾（ふんれい）。古の愚は直、今の愚は詐（いつは）るのみ。  
  
先生が申された。古は、民に三つの疾が有ったが今はもうこれは亡くなった。古の狂は肆があったが今の狂は蕩するのみ。古の矜は廉があったが今の矜は忿戾するのみ。古の愚は直があったが今の愚は詐はるのみ。  
■　古者、[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、淳時也、とする。ありのまま、すなを、かざりけがない、民が純朴であった頃。換言すれば、今は、とりつくろい、まがり、内と外が違う時代。■　三疾は肆、廉、直。疾は病ではなく矢傷、傷から起こるやまい。義疏は、「古の狂者は恆（つね）に肆意（しい）、抵觸に在るを好みて爲す所、此を以て疾者と爲すなり」とし、包咸（ほうかん）は、「肆は意を極めて敢言するなり」とする。思ったことをズケズケ云ひ、人を傷つける。「廉は隅（かど）なり、古人、自ら矜莊（きょうそう）するは、大きに廉隅（れんぐう）有るを好む」、襟を正すにすみずみまでやる。角があり、傷つく人がでようと、正すべきは正す。「愚者は其の智を用ゐず、俯仰を知らず、病、直情徑行に在り」俯仰とは立ち居振る舞いの作法、場所柄をわきまえず行動し、人を傷つける。都人のごとき洗練された配慮、立ち居振る舞いができなかった。■　蕩、忿戾、詐。義疏は、蕩は「拠るべきところが無く」うろうろとする。忿戾は、いきどおり逆らうこと、「今の人は既に惡く、則ち理自ら多くして物に怒るなり」、相手も従はず、更に怒る、結局は喧嘩となる。詐については、「可否を識らず、欺詐して自らを利す」、とみている。■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、平常心を失うことを疾とし、昔の疾が今はない、「俗の益々衰えたるを傷むなり」とする。「狂は、志願うこと太だ高し。肆は、小節に拘わらざるを謂う。蕩は、則ち大閑（たいかん）を踰（こ）ゆ（則を越える）。子張篇に「大徳（大きな徳を持つ人）は閑を踰えず（守るべき規則を外れることがない）。」とあるの反。矜は、持（たも）ち守ること太だ嚴。廉は、稜角峭厲（りょうかくしょうれい：角がとがり激しく厳しいこと）なるを謂う。忿戾なれば、則ち爭いに至るなり。愚は、暗昧にして明らかならず。直は、徑行して自ら遂ぐるを謂う。詐は、則ち私を挾み妄作するなり。」とある。加地先生は名と実の乖離、色厲而內荏、郷原につながる、ひたむき、ひたすら、いちずといった純粋さの喪失とみておられる。民にこの心なくしては、東周を為すことはできない。世を正すには不可欠であるがそれがない。  
読書会：[2009年9月24日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年9月24日)  
  
17）子曰功言令色鮮矣仁  
zǐ yuē qiǎo yán lìng sè xiǎn yǐ rén   
ここにこれが置かれたことは、今の世にはこれが横行していることを改めて嘆息されたことになる。  
読書会：[2009年10月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月3日)

18）子曰惡紫之奪朱也惡鄭聲之亂雅樂也惡利口之覆邦家者

zǐ yuē wù zǐ zhī duó zhū yě wù zhèng shēng zhī luàn yǎ yuè yě wù lì kǒu zhī fù bāng jiā zhě   
子の曰はく、紫の朱（あけ）を奪ふを惡（にく）む。鄭聲の雅樂を亂すを惡む。利口の邦家を覆す者を惡む。  
  
先生が申された。紫が朱を奪ったことを惡む。鄭の音楽が雅樂を亂したことを惡む。利口でありながらが邦家を覆す者を惡む。  
■　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、「紫は是れ間色、朱は是れ正色、正色宜しく行ひ、間色宜しく除く、間色の物を得て用ゐず、以て正色の用を妨奪す。此の言ふは、時として多く邪人を以て正人を奪ふ、故に孔子託して云ひ之を惡む者なり。」[鄕黨篇6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kyotoh.doc)）に「紅紫不以為褻服」とあり、褻服は家に居るときの服、孔子は私服であっても紅紫（あかむらさき）を用ゐなかった。当時、紅紫が大流行していたようである。■　「鄭聲は鄭國の音なり。其の音淫なり。雅樂は其の聲、正なり。時の人多く淫聲以て雅樂を廢す、故に孔子これを惡む者なり。」[衛霊公篇11](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/eireiko.doc)）に「鄭聲を放（はな）ち佞人を遠ざく。鄭聲淫し、佞人殆（あやう）し。」とあった。■　「利口は辯佞の口なり。邦これ諸侯なり、家これ卿大夫なり、君子は辭達のみ。辯佞を用ゐざるは、實無くして國家を傾覆す、故に孔子惡む所と爲すなり。」そして、「孔子、世を忿るも其の言用ゐず。其の言益を爲すこと少し、故に言を復す所無きを欲す。」とある。これは次条と関連する。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、利口は「捷給（しょうきゅう）」、話ぶりがうまくて応対の上手なこと、とする。辯佞と同じ。范氏の説として、「天下の理、正しくして勝つ者常に少なし。正しからずして勝つ者常に多し。聖人以て之を惡む所なり。利口の人は、是を以て非とし、非を以て是とし、賢を以て不肖とし、不肖を以て賢とす。人君苟（も）し悦んで之を信ずるときは、則ち國家の覆ること難からず」としている。覆邦家者とは陽貨となろうが彼は辯佞ではあるまい。  
読書会：[2009年10月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月3日)

19）子曰予欲無言子貢曰子如不言則小子何述焉子曰天何言哉四時行焉百物生焉天何言哉

zǐ yuē yǔ yù wú yán zǐ gòng yuē zǐ rú bù yán zé xiǎo zǐ hé shù yān zǐ yuē tiān hé yán zāi sì shí xíng yān bǎi wù shēng yān tiān hé yán zāi   
子の曰はく、予（わ）れ言ふこと無からんと欲す。子貢が曰く、子如し言はずんば則ち小子何をか述べん。子の曰はく、天何をか言ふや。四時行はれ百物生ず。天何をか言ふや。  
  
先生が申された。予はもう言ふまい。子貢が申し上げた。先生が如し言はれないとするなら、弟子は何を述べることができましょう。先生はこう申された。天は何をか言はん。四季は巡り百物は生れ出る。天は何をか言はん。  
■　予欲無言、孔子が無言でありたいと弟子に申された。何があったのか？弟子達も困った。子貢が言葉を発しているところをみると、どうやら顔回、子路が亡くなって以降のこと、最晩年であろう。孔子は人間社会の外に生きることはなく、人間社会を営む上で言、心にあることを言葉で発し、その言を正しく用いることを目指して来られた。それに反する宣言である。易に、「言は意を尽くさず」とある。易を学ばれたことが影響しているのであろうか？■　小子何述　弟子にとって、孔子が無言となれば、そもそも教えが聞けない。子貢はそうは言はず、先生が言わないとなれば、小子、即ち弟子は述べることが無くなる。子貢は祭祀の器と称された、述べて作らず、孔子あっての子貢であり、孔子無くば述べることがなくなる。無言の先生とは死んだも同然、生きている先生がなすべきことではない、と先生の心を問うた。■　天は物言わずとも、四季は行われ、あらゆる物が生まれ出（いづ）る。子貢には予想できなかった答えが返ってきた。人間は物言わぬ天の命を考える。少なくとも自分はそうしてもの言わぬ天に相対してきた。無言であるから何も無いわけではない。先生は、自分の死を考えておられた。私が死ねば、すべてが無に帰すのであろうか、いやそうではあるまい･･･　しかし、それは、子貢には通じなかった。生きている孔子を支えるのが子貢の生きがいであった。子貢は孔子の死後、三年の喪を終え、更に三年喪に服し、孔子の祭祀の器としての役割を果した。孔子の死をもって、子貢には孔子について述べるべきことがなくなった。彼は、孔子の学を継ぐという方向にはゆかず、その後も政治家として衛や斉で活動をしたようである。しかし、孔子の死の年に42歳であった子貢が6年の喪を行ったことは、政治家としての非常に大事な時期の休止であり、孔子のごとく子貢を本気にさせる存在はもはやなく、その輝きを取り戻すことはもはやなかったのであろう。左伝、哀公27年（BC468：孔子没後11年）に越の句践との会盟に際して、子贛（子貢）がここにいたら、こうはならなかったという記述がある。孔子、死して物言わずとも、その言動は伝えられ、人を育つ。死せる孔子、何をか言はん。

読書会：[2009年10月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月10日)

20）孺悲欲見孔子孔子辭以疾將命者出戶取瑟而歌使之聞之  
rú bēi yù jiàn kǒng zǐ kǒng zǐ cí yǐ jí jiāng mìng zhě chū hù qǔ sè ér gē shǐ zhī wén zhī   
孺悲（じゅひ）、孔子を見むと欲す。孔子辭（じ）するに疾を以てす。命を將（おこな）ふ者戶を出づ。瑟（しつ）を取りて歌ひて、之をして之を聞かしむ。  
  
孺悲が孔子に会見しようとした。孔子は疾であるとしてこれを辭した。將命者（使者）が戶を出ようとするとき、瑟を取りて、使者に聞こえるように歌はれた。  
■　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、「人をして孔子を召さしむ。孔子と相ひ見ゆを欲すなり。孺悲は魯人なり、孔子孺悲の召すに應ずを欲せず。故に辭し、疾有りて堪しく往（ゆ）かざる云ふ。命を將ふ者、孺悲が之を使とする所の人を謂ふ。出戸は孔子疾し辭すを受けて畢（おは）るを謂ふ、而して孔子の戸を出で以て去るなり。」とある。孺悲は、禮記、雑記篇に哀公の命により、孔子に士喪禮（しそうれい）を学び、その聞き書きを文献にしたとあるが、史記、弟子列伝には見えない。使者をたてており、哀公の家臣として相応の身分の人。おそらくは、哀公の命を受けてのことであろう、孔子を召し何をしたかったのか、孔子が何故これを断ったかは、当時の人には周知のことであり、省かれているが、平成の我らには不明。集註は、「是の時に當り、必ず以て罪を得る者有らん。」とするが、不明。聞き書きを文献にしたという事が問題であったかもしれない。士喪禮のみのマニュアル本のようなものが作成されることは本意ではなかった。■　將命者、義疏は孺悲の使者とする。吉川先生は、孔子の弟子で取り次ぎをする者とみておられる。■　断る理由は疾、病とされた。しかし、本当に病と思はれ、見舞いの使者、あるいは本人が来訪する事態は避けねばならない。琴瑟と云ひ、琴と瑟は別物。歌う声を聞かば、疾であるか元気であるかは判明する。使者は帰って、疾であると申されたが、元気そうな歌声が聞こえた、多分孔子の声でしょう見舞う必要はありません、とでも報告したことであろう、と義疏はみている。これは現実的な対応であるが、これを教育法とみるむきもある。■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、孺悲は魯人。嘗て士の喪禮を孔子に學ぶ。是の時に當り、必ず以て罪を得る者有らん。故に辭するに疾を以てして、又其の疾に非ざるを知らしめ、以て之を警め敎うるなり。程子曰く、此れ孟子謂う所の屑（いさぎよ）しとして敎誨せずというものにて、深く之を敎うる所以なり、とする。前条と関連して無言の教えとみる。  
読書会：[2009年10月15日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月15日)

禮記、雑記下第二十一に、「恤由（じゅうゆう）の喪に哀公、孺悲をして孔子に之（ゆ）きて士の喪禮（そうれい）を學ばしむ。士の喪禮是に於てか書（しる）せり」とあり、注に孺とは君主側近の臣を指すものと思われる。今の儀礼の「士喪礼」かは疑問。士喪礼と称すべき記録はできた、ともある（新釈漢文大系、明治書院）。

21）宰我問三年之喪期已久矣君子三年不為禮禮必壞三年不為樂樂必崩舊穀既沒新穀既升鑽燧改火期可已矣子曰食夫稻衣夫錦於女安乎曰安女安則為之夫君子之居喪食旨不甘聞樂不樂居處不安故不為也今女安則為之宰我出子曰予之不仁也子生三年然後免於父母之懷夫三年之喪天下之通喪也予也有三年之愛於其父母乎

zǎi wǒ wèn sān nián zhī sāng jī yǐ jiǔ yǐ jūn zǐ sān nián bù wéi lǐ lǐ bì huài sān nián bù wéi yuè yuè bì bēng jiù gǔ jì mò xīn gǔ jì shēng zuàn suì gǎi huǒ jī kě yǐ yǐ zǐ yuē shí fú dào yì fú jǐn yú rǔ ān hū yuē ān rǔ ān zé wéi zhī fú jūn zǐ zhī jū sāng shí zhǐ bù gān wén yuè bú lè jū chǔ bù ān gù bù wéi yě jīn rǔ ān zé wéi zhī zǎi wǒ chū zǐ yuē yǔ zhī bù rén yě zǐ shēng sān nián rán hòu miǎn yú fù mǔ zhī huái fú sān nián zhī sāng tiān xià zhī tōng sāng yě yǔ yě yǒu sān nián zhī ài yú qí fù mǔ hū   
宰我、問ふ。三年の喪期已（きすで）に久し。君子三年禮を為さずば禮必ず壞（やぶ）れん。三年樂を為さずば樂必ず崩（くず）れん。舊穀既に沒（つ）きて新穀既に升（な）る。燧（すい）を鑽（き）りて火を改む。期にして已（や）む可し。子の曰はく、夫の稻を食らひ、夫の錦を衣（き）る。女（なんじ）において安（やす）きか。曰く、安し。女安くば、則ち之を為（せ）よ。夫れ君子の喪（も）に居る、旨（うま）きを食ひて甘からず。樂を聞きて樂しからず。居處（きょしょ）安らからず、故に為（せ）ず。今女安くば、則ち之を為（せ）よ。宰我出づ。子の曰はく、予が不仁なるや、子生まれて三年、然して後に、父母の懷を免（はな）る。夫れ三年の喪は、天下の通喪なり。予や三年の愛（めぐみ）其の父母に有らんか。  
  
宰我が三年の喪は一年で充分ではないですか、と問うた。君子が三年、禮を為さねば禮は必ず壞れることでしょう、三年音樂を為さねば音樂は必ず崩れることでしょう。舊穀は既に尽き、新穀が既に出回っており、季節の木を切り火を改めるにも一年で十分ではありませんか。先生が申された。あの美味い稻を食し、あの華やかな晴着を衣る、お前はそれでも心安らかでおれるといふか。宰我が、安らかです、と答えた。お前が安らかといふならそうするがいい。君子というものは、喪に居れば、旨いものを食しても甘味（うまみ）を感じず、音楽を聞くも樂しくはないもの。居處にあっては心安からず、故に何もできないものだ。今お前は心安かで出来るといふ。宰我が退出すると先生が申された。宰予はこれ仁ならず。子というものは生まれて三年、然る後に父母の懷から離れるもの、かの三年の喪は天下に通じる喪であり、宰予にも父母に対する三年の愛が有るのではないのか。  
■　宰我は宰予、子我、魯の人。[先進篇2](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/senshin.doc))に、言語、宰我、子貢とある。弁舌に優れた弟子。■　三年之喪には後の儒家では二説ある。漢の鄭玄（じょうげん）の二十七ヶ月、魏の王粛（おうしゅく）の二十五ヶ月、二年強。■　期已久矣、期jīは周年（一年）なり、已久矣は、すでに久し、一年で十分長い。■　君子三年不為禮禮必壞三年不為樂樂必崩、衣食住に斎戒し、居に籠り、禮樂に列しない。この下克上の世において、家臣ならいいが、君主がそうすれば、君主の力が衰えたこのとき、その存在感はますます希薄となり、禮は壞、樂は崩する恐れがある。定公より哀公への時代のことであろうか、そのことが問題となったと思はれる。■　舊穀既沒新穀既升　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/youka.html)は、宰我の意として、「本より天道に依る、天道は一期、則ち萬物悉（ことごと）く易らざること莫（な）し。舊穀は既に沒して盡き、又、新穀已に熟す。則ち人情亦宜しく之を法（なら）ひて奪ふ」と記す、一年たてば穀が新しくなるのは天道、人情もそれと同じ。■　鑽燧改火　改火の木を切り出し火をおこす。義疏は、「改火の木、五行の色に隨ひて變るなり。楡柳（ゆりゆう）、色は青、春は是の木、木色は青、故に春楡柳を用ゐるなり。棗杏（そうきょう）、色は赤、夏は是の火、火色は赤、故に夏に棗杏を用ゐるなり。桑柘（そうしや）、色は黄、季夏は是の土、土色は黄、故に季夏桑柘を用ゐるなり。柞楢（さくゆう）、色は白、秋は是の金、金色は白、故に秋に柞楢を用ゐるなり。槐檀（かいだん）、色は黒、冬は是の水、水色は黒、故に冬槐檀を用ゐるなり。所以、一年必ず改火するは、人時に依りて其の火で食すが若し、則ち氣を得て又宜し。」とする。古は四季と土用に火を改めた。火も一年で改まる。初火を宮中で起こし、家臣に分ち与えた。■　期可已、期にして止む可べし、期にして可なり、とも読む。一年で充分である。■　食夫稻衣夫錦　義疏は、「稻は穀の美なる者、錦は衣中の文（あや）華なる者」とする。美味い穀を食らい晴着を着る。一年の喪で、そうして気持ちが安らぐというなら、そうすればいい。君子というものは、喪（三年の喪）に服するとき、旨い物を食しても甘味（うまみ）を、音楽を聴いても楽しく感じない、居處して気持ちが安らぐことがないのでそういうことはしないものだ、一年でくつろげるという宰予は不仁であるといふのが孔子。宰予が危惧することと孔子の危惧することがすれ違っている。■　三年之喪天下之通喪　三年の喪は天下で行われているもの、それは、子が生まれて三年父母の懐で育てられたことによる。その父母を亡くせば、心安らぐには三年はかかるが道理。宰予にも父母を惜しむ三年の愛が有るはずだが、どうもそうではない。当時、三年之喪も行われない方向にあった。「子貢、告朔の餼羊を去さむと欲す。子の曰はく、賜や爾、其の羊を愛す、我は其の禮を愛す（[八佾篇17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）。」子貢が形式化し内実のない儀礼を廃しようとしたことに対する反応と同様。その心を残すためにその形も残す。  
読書会：[2009年10月15日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月15日)

三年の喪に関しては、礼記、[三年問第三十八](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sannenmon.doc)にあるごとく、緦（三カ月の喪）や小功（五カ月の喪）を殺（最少）とし、期（一年の喪）と九月（九カ月の喪）を間とし、至隆（最長）として三年の喪とされる。

22）子曰飽食終日無所用心難矣哉不有博弈者乎為之猶賢乎已

zǐ yuē bǎo shí zhōng rì wú suǒ yòng xīn nán yǐ zāi bù yǒu bó yì zhě hū wéi zhī yóu xián hū yǐ   
子の曰はく、飽（あ）くまで食ひて日を終へ、心を用ゐる所無し。難いかな。博弈（はくえき）なる者有らずや。之を為（する）は猶を已（やむ）に賢（まさ）れり。  
  
先生が申された。一日中飽きるほど食って、心を用ゐない。（一人前になるのは）無理だな。博弈者といふのが居ないか。これをやるほうが、心を用いるのを已めるよりは賢る。  
■　飽食終日無所用心　飽食は満腹、終日は一日中。用心は、気を使う、苦心する。何事にも心を働かせない、何にも頭を働かせない、一日中何の欲望ももたない、と釈される。■　難矣哉、困ったことだね、そんなのは困る、なんだそれは、そういうことはむつかしい、と釈される。■　博弈、賭博のこと、博は双六、弈は囲碁。無所用心、用心を已（止）むより、博弈をする方が賢（まさ）る。馬融（ばゆう）は、「その拠って楽しむところ無く、善（よ）く淫欲を生ずるが為なり」、人は無所用心だと淫欲に走る、博弈を教えて心を制することが賢明といふ。博物誌に、「堯、囲碁を造り、丹朱（堯の子で愚者）之を善くす。」とする。「群居して終日言ひ義に及ばず、好んで小慧を行ふ、難いかな（[衛霊公篇17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/eireiko.doc)）。」とある。これに鑑みれば、弟子が一日中飲食をしていたことがあり、よく飽きもせず食うものだ、他に心を用いることもない（普通はそんなことはできるものじゃない。退屈してしまうものだが）。困ったものだ。博弈をする者がいるだろう。心を用いるということでは、彼らの方が賢明じゃないか、と叱りつけた。

読書会：[2009年10月24日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月24日)

23）子路曰君子尚勇乎子曰君子義以為上君子有勇而無義為亂小人有勇而無義為盜

zǐ lù yuē jūn zǐ shàng yǒng hū zǐ yuē jūn zǐ yì yǐ wéi shàng jūn zǐ yǒu yǒng ér wú yì wéi luàn xiǎo rén yǒu yǒng ér wú yì wéi dào   
子路が曰く、君子勇を尚（たつと）ぶか。子の曰はく、君子義以て上（たつとぶ）ことを為（す）。君子勇有りて義無くんば亂を為す。小人勇有りて義無くんば盜（とを）を為す。  
  
子路が申し上げた。君子は勇を尚ぶのではありませんか。先生が申された。君子は義をより上ぶものだ。君子に勇がありとて義なくば亂る。小人ならば勇ありて義なくば、盗賊となる。  
■　尚shàng、上shàngが通用している。尚は重んじること、上に重んじるとそれより上位の意味をかけている。■　朱子は、宋の胡寅（こいん）の「疑うらくは、これ、子路初めて孔子に見（まみ）ゆるときの問答ならん」を引用する。司馬遷、仲尼弟子列伝によれば、孔子との出会は、「子路は卞(べん：せっかち)の人なり。性鄙（いや）しく、勇力を好み、志伉直（こうちょく：剛強でまっすぐ）にして雄鶏を冠し（雄鶏の羽根の冠をかぶり）、豭豚（雄豚の皮の剣飾り）を佩び、孔子を陵暴する（あなどり、あばれる）。」という。孔子家語によれば、孔子が子路に「何を好むか」と問うと、「長剣」と答えている。孔子が学をすすめると、「学に何の益があるか？南山に真っ直ぐ伸びた竹があり、これを切って（槍に）もちいれば、犀の皮すら貫ける」と反論する。「素直な性格のまま、真っ直ぐ生きることのどこが悪い」と問う。孔子は、「削って羽根をつけ、鏃（やじり）で磨けば、もっと深く入るではないか」と答える。竹をもっと美しく、鋭くするものが学という言葉に子路は弟子入りを決断している。この時の問答とすると、子路は孔子が勇のある人間かを問うたことになる。勇のみでは駄目であると諭されたことになる。これは、[子路篇3](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/siro.doc))、「子路が曰く、衛の君、子を待ちて政を為さば、子、將に奚ぞ先にせん。子の曰はく、必ずや名を正さんか。」の時と考えることができる。子路は、孔子が仕官可能なラストチャンスと思ひ、先生、勇をもって決断してくださいと子路は迫った。勇においては孔子を凌駕する子路である。その子路に、義なくば、君子の行いをしても乱、小人の行いをすれば盗になるだけだと諭したことになる。結果は、最悪であった。この答えにがっかりし、孔子とは袂を分かち、子路は独自に出公を担ぎ、彼の窮地を救うために命を落とした。古の勇には疾あった、古之勇也誠、今之勇也亂、子路の勇をここで思い起こすことになる。  
読書会：[2009年10月24日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月24日)

24）子貢曰君子亦有惡乎子曰有惡惡稱人之惡者惡居下流而訕上者惡勇而無禮者惡果敢而窒者曰賜也亦有惡乎惡徼以為智者惡不孫以為勇者惡訐以為直者

zǐ gòng yuē jūn zǐ yì yǒu wù hū zǐ yuē yǒu wù wù chēng rén zhī è zhě wù jū xià liú ér shàn shàng zhě wù yǒng ér wú lǐ zhě wù guǒ gǎn ér zhì zhě zǐ yuē cì yě yì yǒu wù hū wù jiǎo yǐ wéi zhì zhě wù bú xùn yǐ wéi yǒng zhě wù jié yǐ wéi zhí zhě   
子貢が曰く、君子も亦惡（にく）むこと有りや。子の曰はく惡むこと有り。人の惡を稱する者を惡む。下流に居りて上を訕（そし）る者を惡む。勇にして禮無き者を惡む。果敢にして窒（ふさ）がる者を惡む。曰はく、賜も、亦惡むこと有りや。徼（うかがっ）て以て智と為る者を惡む。不孫にして以て勇と為る者を惡む。訐（あば）いて以て直と為る者を惡む。  
  
子貢が、君子も亦惡（にく）むということがありますかと問うた。先生はこう申された。惡むことはある。惡稱人のを言いふらす者を惡む。下流に居て上を訕る者を惡む。勇気はあるが禮の無い者を惡む。果敢であるが窒（思い込みの激しい）者を惡む。賜も亦惡むことがあるか、と問はれた。徼（かす）め取って智となす者を惡む。不孫な態度で勇となす者を惡む。訐くことで直となす者を惡む。  
■　「仁者のみ能く人を好み、能く人を惡む（[里仁篇3](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm)）。」「不仁を惡む者は其れ仁を爲さむ（[里仁篇6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm)）。」子貢が、孔子がどういう人間を惡むかを聞いた。惡wù稱人之惡è、人の悪（あく）をあげつろう、いいはやす、を悪（にく）むと釈される。徂徠は、稱は揚言（公然と言いふらす）、君子は口を絶ちて人の悪を言はぬもの、それを揚言し、衆に播（はん）すを悪む、とする。■　下流、子張篇20)に、「君子惡居下流」とある。現存最古のテキスト漢の熹平石経（きへいせつけい）では「居下而訕上者」とあり、子張篇にひかれて下流となったとみる説もある。徂徠は、上を訕り、民の怨みを煽動して、乱を生ずる、それ故に下位と言わずして下流というとする。■　窒、馬融は、「窒塞（ちつそく）」、ふさがると訓じる。果敢であるが思い込みが激しく人の言ふことを聞かない。■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「人の惡を稱するは、則ち仁厚の意無し。下の上を訕るは、則ち忠敬の心無し。勇にして禮無くば、則ち亂を爲す。果にして窒がれば、則ち妄作す。故に夫子之を惡む」とする。■　賜也亦有惡乎、孔子が子貢に問ひ返された、子貢が自分から言ったとする説もあるが、師から問われてから答へるのが礼、子貢にそれはない。■　集註は、「徼は、伺い察するなり。訐は、人の陰れたる私を攻め發（あら）わすことを謂う」とする。徼jiǎoは、かすめるとも訓じ、較、教、窖（隠し容れる）に通用する。人の考えを掠め取り知zhì、智zhìのこと、智者のごとく振舞う。不孫xùnは、不遜な態度で勇者のごとく振舞う。人の個人的な秘密を暴き直者のごとく振舞う。智者まがい、勇者まがい、直者まがいを子貢は嫌った。孔子の惡むは仁を為すに通じる。子貢の惡むは自らを律する。  
読書会：[2009年10月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年10月29日)

25）子曰唯女子與小人為難養也近之則不孫遠之則怨

zǐ yuē wéi nǔ zǐ yǔ xiǎo rén wéi nán yǎng yě jìn zhī zé bú xùn yuàn zhī zé yuàn   
子の曰はく、唯女子と小人養ひ難しと為す。之を近づくれば則ち不孫、之を遠ざくれば則ち怨む。  
  
先生が申された。唯、女子と小人を修養することは難しい。近づけると好かれたと慢心して不孫になり、遠ざけると嫌われたと怨む。  
■　女nǔ で女性、nù で嫁入りさせる（uはü）、rǔで汝。近jìn、孫xùn、遠yuànは去声。■　養は修養すること。孔子は弟子を養う、修身し、出仕、出世することを教へる。■　近jìnは親しいことでもある。近くに置くと、好かれ、評価してもらっていると増長し、不遜をなす。遠yuànは怨yuànに通じる。遠くに置くと、嫌われ、願yuànを遠ざけられたと怨む。顔回や子路、子貢ならば、かような勘違いをすることはない。先生にはそうされる理由があると考え、自らを省みる。しかし、そう考えそう行動できる人は少ない。普通は、誰しも、顔色をみて行動する、それを戒めている、そこまでは平成の人も納得できよう。それを女子と小人の典型とするのは、小人はともあれ女性蔑視でけしからん。封建時代の遺物、男尊女卑であるとなろうか。■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「此の小人は、亦僕隸下人を謂うなり。君子の臣妾に於る、莊以て之に涖（のぞ）み、慈以て之を畜うときは、則ち二つ者の患い無し。」僕隸は僕従、召使、古くは車馬などを扱う者、下人も召使、耕作、雑務、馬引きなどであるが、朱子は臣妾についてくる僕隸下人としている。君子の臣妾といふは、多妻を前提としており、寵愛、相続を巡る争い、不義密通も多く、修身を説くなどは表向きのこと、相手を振り向かせ、子をなし、その子を位につける手練手管の方が実用。その僕隸下人に修身を説いても聞く耳を持てない。朱子は、莊、おごそかに相対し、慈、いつくしみの心で養へば、この二つの患ひはない、とするがどうであろう？朱子が女子を臣妾、小人を僕隸下人とそこまで、極端な限定をするのは何故か？■　江戸時代の徂徠は、「小人は細民なり、女子は形を以て人に事（つか）ふる者なり。細民は力を以て人に事ふる者なり。皆その志ざしは義に在らず。」となす。どうやら義に基づいた行動原理を持たない点に焦点をあてており、力や利になびく、それを戒めた、この方がすっきりする。■　昭和の吉川先生は、論語の教えの全部が、現代には通用しないことを示す条のように思われる、とする。これは賢明な対応である、が、面白味がない。■　男尊女卑は、父権的家督相続制度が根底にある。君主は相続人たる嫡男を最優先させる。側室を納れても男子を得んとする。男の中でも嫡男を一等とする。夫人には子を為すこと、子を育て、男児には嫁を迎え、家を守ることが求められた。女児は嫁に出し、姻戚関係を築き相互の勢力を拡大し、嫁ぎ先で子を為しその家を守ることが求められた。男児は、国を治めること、君主として治める側と、君主に仕えて治める側と立場は異なるが、政治に参画し、業績をあげることが求められた。しかし、これはある一定以上の支配階級の規範であり、これからはずれる者には貫徹しない。漢代以降、科挙制度（日本にはない）が成立してから、日本では、江戸幕府の成立により、身分制度のなかに固定された。女は世を動かす男に仕へ、子を為すだけの道具とうそぶく男尊女卑といふものは、現世権力しか目に入らぬ極端な考え方であろう。戦乱を旨とする戦国の世にあっては、父権的家督相続といっても負ければ意味がない。父権的家督相続が身分制度として貫徹しない社会は、母権社会と同じく、男尊女卑も貫徹しない。尊卑は身分制度に起因すると同時に尊敬、卑下という心の働きにもよる。先王を崇敬し、その禮樂の文化を享受する中原の民は、禮樂を知らぬ民を東夷南蛮西戎北狄と卑下した。諸々のレベルで尊卑が意識される。最高神が男神、女神、性を持たぬかにより、類推も可能となる。孔子は春秋から戦国にかけての下剋上の時代を生きており、崩壊しつつあるとは云へ、諸侯が宗廟を維持する伝統を守ろうとしていた。詩、曹（そう）風、侯人（こうじん）に、「婉（えん）たり、變（れん）たり、季女（きじょ）ここに飢う」とあるが、これは、家祀に仕えるつつましい季女がひそかな愛情に苦しむことを歌っている。祖先、祖先神を祀る時代には、季女（日本における斎王の役割）は、子を為すことを絶って祖霊、祖先神に仕へる婦であり、その婦には敬意が払はれていた。また、女性が子を産むことは祖先を後継する子を授かること、子宝であり、その腹を大切にすることはあっても、それを機械のごとく子を産む道具とする発想はあるまい。孔子の時代には、身分制度があり、政治に参与しない階級が多数であり、支配階級であっても女性には参政権がなく、政治的修養が士階級までの男性に限られるのは仕方がない。国民主権の世では、特定の家族が抜きんでた力を有すような父権的家督相続は否定され、長い伝統と慣習によりその意識は長く残存するが、男尊の根拠が失せる以上、その意識もいづれ失せる、身分制度も否定されており、男も女も、君子も小人も平等の国民であり、サッチャーやメルケル等々女性政治家の業績をみれば、男女差より、個人的資質の差の方が顕著となるのはみての通りである。孔子がこの時代に生きるとすれば、女子という言葉は発してはおられまい。男女席を同じくすることによる問題にどう反応されるか、興味あるところだ。

義疏は、「君子の交りは水の如し、亦江湖を相ひ忘る」、相忘江湖とは、我々が空気の存在を忘れて行動をするごとく、水を湛（たた）える江（大河）や湖では魚が水の存在を忘れること、そばに居ようが、離れていようが、義に和し、不義を悪（にく）む。この中に、女性君子が居ればどうか？水の如し、「男女相ひ忘る」ですむか？男が女、女が男の顔色をみて、行動するということは起こらないか？史記、刺客列伝に、「女は己を説（よろこ）ぶ者のために容（かたち）づくる」とある。女が美と利の択一を悪魔に迫られればどちらを手にするか？男女平等となれば、化粧は意味を成さなくなり、利に走るのであろうか？男も女の美に目もくれずに、利に走るのであろうか？大勢として、女が化粧を止めることも、男が女を追うことを止めることもあるまい。利や義を曲げる愛憎、好悪の情に捉われぬことは容易ではない。セクチャルハラスメントなるガイドラインを引いて、事が足りるかどうか？「未だ德を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり。（[子罕篇17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.doc)）」男女同席の禮を定むに苦闘されることであろう。  
平成の日本人は資本主義と民主主義の世を生きている。極論すれば、利を求め、利の調整を多数決で行うシステムであり、これは国民をあげて小人を作るシステムと云へよう。ではこのシステムにおける義とは何か。宗教戦争を経て産業革命を為した資本主義の精神は、金儲けに意味があるのではなく、労働をして適正な利潤をあげ、稼いだ金を浪費することなく投資に回し、資本を拡大再生産し、国富を増進し、国民生活を向上させることではなかったか。更に、自由競争と機会均等を確保するために、カルテルや独占を禁止し、寡占化を阻止し、皇室を除き、特定の家族が肥大化せぬよう相続税を課し、その勢力を削ぐことを目指してきた。そのはずが、近年は、グローバル競争の名の下に、合併を推進し、不況にあっては、内部保留は崩さずリストラを断行、蔵を閉じて門から派遣を追い出し、税金での救済に委ねる。景気刺激に、大型倒産に社会システムを維持するためにと税金投入を要請する財界、合併と格差の拡大と貧困の拡大再生産を止むを得ずとするのは、資本主義の義を損なうものであり、昔の言葉でいえば、ご乱心というほかありますまい。これでは、小人にももとる。子の曰く、「今の政治を行ふ者、養ひ難し。」故に、政権が代わったのではなかったか。

読書会：[2009年11月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年11月7日)　PART-1

読書会：[2009年11月14日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年11月14日) PART-2

26）子曰年四十而見惡焉其終也已

zǐ yuē nián sì shí ér jiàn wù yān qí zhōng yě yǐ   
子の曰はく、年四十にして惡ま見（るる）は、其れ終るのみ  
  
先生が申された。年四十にして惡まれたままでは、もうお終（しま）いだな。  
■　見惡wù、見笑は笑われる、動詞の前に見を置いて受動形となる、惡（にく）まれること。■　[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「四十は成德の時。人に惡まるれば、則ち此に止むのみ。人の時に及んで善に遷り過を改むるを勉めしむるなり。」とする。[子罕篇22](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.doc))に「四十、五十にして聞こゆること無からむ。斯れ亦た畏るに足らざるのみ。」ともある。四十は「不惑」とされる。  
読書会：[2009年11月14日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年11月14日)

了　2009.11.15